

備前焼

第一卷第三號

註釋
五問
五答
古伊部神傳錄

備前焼宣揚會發行

第一卷 目次

五問 古伊部神傳錄註釋……………桂 又三郎(一)	五答 古伊部神傳錄註釋……………桂 又三郎(二)
その俳諧……………西村燕々(三)	伊部焼雜筆……………正宗敦夫(四)
伊部焼雜筆……………正宗敦夫(四)	學界消息……………(五)

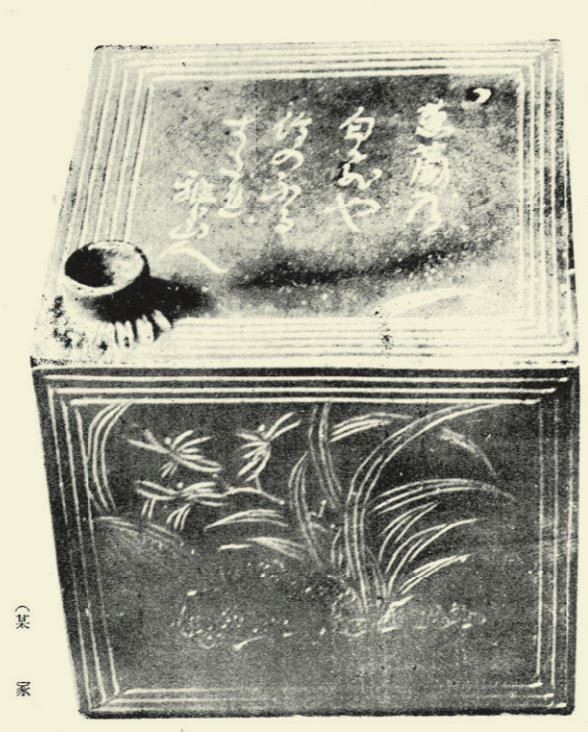


木村泰武作
流胡麻花入

泰武の作品は多く角徳利に彫刻を施したもので、斯くの如き茶器は實に珍らしい。

(東京 山口吉三郎氏蔵)

窯印



泰武作及刻
水滴

(某家蔵)



(藏氏々燕村西 山岡)「リもぐすう」編郎八平村木

五問 古伊部神傳錄註釋

桂 又三郎

解説と資料的價値

本書は嘉永二年、伊勢豊受大神宮の権禰宣、度會末彩が備前焼の窯元へ伊部焼の由来その他五つの問を訊ね合したるに對して、當時窯元中最も學問のあつた木村平八郎泰武がその五つの問に答へたものである。之れより以前備前焼のことを書いた本は數種あつたが、その何れもが遠く神代時代のことに觸れて、肝心備前焼のものに就いて書いたものは極く少く、またその量も至つて貧弱なものであつた。兎も角備前焼のことは本書によつて初めて詳しく世の中へ照會せられたわけで、その功蹟は非常に大きいと思ふ。

本書がはじめて版になつたのは明治廿七年三月で『本朝陶器攷證』卷壹に輯録せられてゐる。爾來單行本で出版されたものが二三種あり、また昭和六年『吉備群書集成』第五輯中にも輯録されてゐる。更らに資料としての價値は之亦相當高く、その後出版された備前焼の書籍には殆んど全部本書の資料を引用してゐる、さうした點から考へてもその資料價値といふものは充分點頭されるわけである。



古伊部神傳錄
五問
五答
「五問古伊部神傳錄」の寫本
(伊部 木村貫一氏蔵)

著者木村平八郎泰武の墓

伊勢の金森得水とその友人會度末彰（一つに福井雨洗ともいふ）との共著で『本朝陶器攷證』六卷を纏めたが、その資料蒐集に際して全国各地の窯元へ調査方を依頼したことがある。そしてその一つとして備前の窯元へ照會したものが、即ち五問五答で古伊部神傳録編纂の原因となつたものである。

「世に茶人のもてあそぶ我國々の陶器其窯の起源傳來のゆゑよしを詳らかに聞しらば翫ぶにもまた一入ならむと、年ころ家殿のほりせられしを、一日神都の茶友福井雨洗ぬし來遊の折からふと語り出られるに、此ぬしとよく其志ありと語り合さるゝを、寔に渡りに船を得たるなりとて遠きは更なり、ちかきをも年々に大御神の大廟を捧けて國々に行おさむる御師の家頼にそのぬしの紹介もたのみあつらへ聞し集めよせられたるに、またこゝらの年月古史雜書に見及びて拔萃なし於かれし雜録をもとに書せられたるが、いつしか六卷のふみとなりぬるを本朝陶器攷證となつつけられたり（以下略）」

尚「同書」卷一に、泰武が、「福井雨洗五ヶ條の間を設けて、かの地（伊部）へ遣したるなり、此五答にて備前陶器の事分明なるべきか」とある。之れによつてみると、末彰の五問（嘉永二年）は伊勢の代々神樂の一行によつて伊部へ届けられたことが判る。そして嘉永三年冬木村平八郎泰武の五答に對して、末彰が禮狀を出してゐるが、その文中に次の如く述べてゐる。

「（前略）世に茶道にたづさはれる人の、その國々の陶器を愛翫びながら、その國のはいつごろより焼せぬ、かの國のは何といへるものよりぞ造出せるなどゆふに、その起源を辨へ知れるものなく、たま／＼陶器の鑑定をよくすといへるものも、たゞ斯古の差別をいひ、藥かたちの上よしあしを論じ明らむるまでにてやみぬるを、年ごろ本定なく、あはれかきなちからをもつて、國々所々に焼出せる陶器の起源を漏れなく搜り求めて、一卷にも綴りなして、おなじ心の友達にも見せ、後の世にも傳てしかなと、こゝにおもひを起しつ。其國々にえにしある人々にあつらへ聞えて捜ること、三とせ四とせになるまゝに、やう／＼集り來りて、ふるき、あたらしき、ともに七十竈に餘りたる。近きに志を果しんとせる歎、いふやうあらず。（中略）こゝに備前の國伊部の里の陶は、世にあるが中にもいと古く、神代より傳へ來ぬるよし聞ゆれば、さらに其故よしを知らまほしくて、そもまた五箇の間をもふけて、尋やりにしに、その陶工の中に木村平八郎泰武をちと聞えしは、竈元六姓の一人にて、工の道はさらなり風雅の志もある人にや、おのれが問を喜びいれて、その答を書綴り、五問五答古伊部神傳録と號け贈れり。（以下略）」

關係者の略傳

問て曰 備前國伊部燒物、往古發端の時代承度候、餘り古き事分り兼候は、凡天正慶長より當時窯の在所は相違ひ不申候や、伊部村の内、何と申處に釜有之候や、何箇所にて其在所承度候。

答て曰 吉備津前州和氣郡伊部の産、燒物の高德往古神代神傳の事、書類梓にちりばめずといへども、神代の卷日本記にのりたる事普く世人の知る處なれば、今改めて盡すべき文力もなければ、高問數度に及びて無返も禮を失ふに似たり。翰をとり紙にうるほす初と成りぬ、抑日本開闢天神七代より地神五代大始神に渡せ給ふ。天照大神大惠の餘り、萬物生せずといふものなご、國常立尊開せ給ふ大日本といへるも、大器の始なり、神ありて人あり、人また器ものなり、玉水よくめぐりて玉體をたもつ、水、火、風の三德、寸陰もはなるゝひまなし。是が爲に智、仁、勇の三德をうむ。三德また器なり。大御神の照耀かくる事なし。貢物生じて器生ずる事陰陽なり。水、火、風の三德より眼力の利智なり、一心のしたゝまりある、仁なり。すゝむるもの勇なり。是智、仁、

五問 古伊部神傳錄

勇の三德、玉體に集りて工夫の一德となりぬ。そが中より器造の工夫出たり。古瓶の元祖是なり、こりべは足なり、足は立のもとなり、丸きは體なり、口は物入るの初なり。智、仁、勇の三德より器もの生ずる也。是建物の元祖なり、水火風の三德より釜の形ち生るなり、大御神の御代に是を造るもの、人にして人にあらず、三德一體一心に集りて一德神と稱すべし。今のごとき人名さらになし、此一德神靈組の大祖なり。大御神の兄素盞鳴尊、大蛇を征じ給ひし時、一德神に勅令ありて、八瓶を造らしめ給ふ。八岐八頭の大蛇、八瓶の毒酒にくるしみ、終に寶劍の威徳に命を絶つ。是一德神の器の明德、八醜の酒は尊の三德のなす處也、よき備へもの捧たりとありて、已後吉備津國と國名の文字改むる也。其時瓶を造りたるは赤坂郡石上なり、同所の土にて作りたり。大蛇を征給ひし寶劍、同所に納り、布都魂神社御神體となり、古の一の宮是なり。八瓶は尊の神傳の大器なり。神傳神孫の勅師師と賞し給ふ。尊の蛇征の頃今の文字なし。尊の御よみ歌に、八雲たつと五文字をそへ給ひ、後出雲國と號す。

神武天皇日本の地形秋津せに似たりとありて、秋津洲と號給ふ。神武天皇、綏靖天皇の御宇、日本紀顯し給ふ。人皇十一代垂仁天皇の御宇迄天子崩御ならしめ給ふ時、公卿三公殉死し給ふ。垂仁天皇御仁君にて三公殉死を憐み給ひ、家朝の禮もかけず、臣も損せずといふ兩全ありやと、勅

命ありければ、野見宿禰進み出、吉備津國に土師の司あり、人形を造らしめ、殉葬にかへ給ふべしと奏し給ふ。此時の土師某、勅命に依つて人形を造。所は邑久郡土師村にて造れり。今において細工致たる場所を細工原と、里人等云傳。其時代同郡磯上村の田土を取り其土を以て作り人形をもつて殉死にかへ給ふ。是始也。天皇あつくめで給ひ野見宿禰に土師の姓を給はり、土師家には風折烏帽子直垂を免給ふ。されども作者の名なし。土師某とあり。其外須惠村、釜が原など、古跡有。今の伊部より二里計未申にあたる。伊部燒の釜跡なりと里人云傳るなり。此外村の戌亥にあたり熊山といへるは、登り五十町の高山なり。此深中にも窯あり。此外村内所々にありて、村の辰巳天正十年まで下伊部村今浦伊部是なり、此所にも釜跡あり、大瓶、摺鉢等造れり。其瓶割澤にあり。花瓶は欽明帝、用明帝、始て佛法歸依し給ふ時、勅命によりて造りたり。大化より年號始り同三年正月元旦朝賀始る、孝德天皇の御宇なり。此時代天子の祭器專なり。右にいふ所窯跡所々にありて所定ならず、應永年中に今在釜の在處定まる。村の南、北、西にあり、南の方榎原山の麓に一箇所、南窯と名付く。北の方不老山の麓に一箇所、北窯と名付く、西の方育王山の麓一箇所、西窯と號く。應永年中より今嘉永二年まで凡四百五十年となる。釜場處不變。釜口明には、御當代國の大司より奉行役出張ありて嚴重なり。

【註】

一 「古瓶」三石入三石入元祖是なり、之は二通りに解釋が出来る。一つは世間に比較的多い山麓窯の二石入三石入の大瓶の元祖が是なり、と云ふことゝ、また古瓶二石入、三石入が即ち元祖であるといふ風にもとれる。前者の意味だと比較的無難であるが、後者の場合だと一寸變んだ。

二 「釜」は竈のことであらう。

三 「一德神靈組の大祖なり」、伊部では今日でも窯の神様として 天太玉命をお祭してゐる。此の一德神は即ち天太玉命を指したものであらう。天太玉命は高皇產靈神のお子で、日神隱盾の時和幣を作つた、齋部氏の祖で安房の一ノ宮である同國安房郡の洲崎神社の御神體である。（古語拾遺、日本一宮記）

四 泰武は素盞鳴尊が八岐の大蛇を退治した時、毒酒を入れた容器が備前燒の瓶であつたと云ふて居り、之れが其の後備前燒の神代相傳説を生み、またそれが蓋元の表看板でもあつたが、今日では單なる傳説として取扱はれてゐる。尙詳しくは島山信次著『伊部燒通史』五頁―九頁参照。

五 吉備國の地名傳説として『和氣絹』（寶永六年）に「書には、神功皇后難波津より播磨の灘を過、吉備の牛窓に着給へば、其所の長出て貢御を奉る。是を初として吉備の國の内にて、貢御を奉る事三度也。是れによつて初奉る所を備前といふ。中頃奉る所を備中と云ひ、後に奉る所を備後と云ふとあり。」

金森得水 伊勢國度會郡田丸城主久野丹波守の家老、名を仲、字を長興といひ、號を琴屋叟、後に得水と改めた、また別に玄甲舎とも號してゐた。天明六年に生れ、性來茶を好み千宗佐に師事して遂に茶道の蘊奥を究めた。また文藝にも秀でて和歌をよくした。元治二年二月歿、享年八十歳。著書には、古今茶話五十卷、習事十三箇條大槩抄附錄五卷、本朝陶器攷證六卷、和歌集等がある。（『本朝陶器攷證』序文）

會度末彰 榎倉氏の出、福井帶刀の家を繼ぎ福井姓を名乗る。のち豐受大神宮の權禰宮に補せられ、正四位上に陞せられた。尙度會姓は豐受大神宮の祠官の總稱である。末彰は通稱帶刀といひ、後に權亮、大弼と改めた、また號は端隱、四隅雨洗などと稱した。書畫、篆刻を小保薙庵（伊勢山田の人、明和二年一、天保八年）に學び、特に篆刻の妙手であつた。また茶道にも達してゐた。明治十八年八月廿二日歿、享年八十五。（神宮司廳儀式課報）

末彰は木村泰武の五答に對する禮として、石に泰武の姓名を篆刻して贈つた。その事は前にも引用した末彰の禮狀の一節に次の様に出てゐる。

「（前略）神代より造れるといふ傳へのおち／＼、なにくれとなく、いとまめやかに書つけて、おのれが問にもることなく、伊部陶器の起源あきらかに知られて、むば玉の闇の夜に、柄の大炬を燃し得たらむにことならず。うれしともいとうれし。いかで一品をもよせ贈りて、このよろこびをいひ聞えてんとかたむけども、是ぞとえしもおの節に次の様に出てゐる。

もひよらざれば、若きころ學びにし印章を物してとはおもふものから、さる業も久しう踐たり、はた近き年は、目さへ腕さへおとろへはてぬ。成いてたりとも、拙劣むかしに勝りたれば、人の用に立べくも覺えず、さはいへ、筆力をもて書贈りし人の爲には、おのれもまた刀力をもて答へざることを得ず。誠に一面の石を磨きて、そが姓名を彫出ぬれば、そをもて泰武をちに贈らまく題す。をちの心になふやあらずや、いまだ知るべからず。さかしらに姓名を彫たるさへ罪得がましきに、拙業をもて贈りものとすなるは、いと／＼鳥譚がましく、禮なきに似たれど、さがたき罪も、またその拙きもゆるされて、すこしき志をだに容られなば、幸甚しといふべからむ。おちはいまだ相知れる人にあらねば、押つけに文もていはんすがにて、かの石をおくれる序に、おのれがおもふよしを、いさゝか斯くは書記してとりそへつ。」

木村平八郎泰武

窯元六姓の一人で北窯に屬してゐた。家は不老山の南山麓、現在品川白煉瓦會社伊部工場の一部。泰武は邑久郡牛窓、時岡孫四郎の三男に生れ、窯元木村喜平太泰知天保十二年七月歿の養子となり、姓を木村と改めて平八郎泰武と名乗つた。家に櫻の老木があつたので、垂櫻舎と稱し、また陽花堂欣之、雅下などと號してゐた。尙泰武は窯元中稀にみる學者で學問も相當深く、その上書畫、詩歌、俳句などもよくした、そして當時盛んに流行してゐた伊部燒の角徳利に書畫や俳句などを彫刻し、之を名物として賣り出してゐた。また一時江戸へ住居してゐたこともあるが、その當時松前侯の寵愛を得て郷士として遇されてゐた。安政五年十一月廿八日歿。戒名冷香院鏡圓大雅、辭世の句、左

なくとも横道ふかに、秋の風、雨雲のほころび口や梅の月。



木村平八郎泰武の墓（現在）



大饗家の墓所（現在）